2013年(平成25年)4月24日(23日発行)　日刊ゲンダイ

連載㉘

医者も知らない平穏死

私には決められない

〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に『平穏死』10の条件」など。

「日本のがん患者さんは、子供っぽい」

がん患者の会を立ち上げて精力的に活動している方から、こんなことを言われたことがあります。

「がんには、治療が不可能なものがある。そんな時、〈何がなんでも治してほしい〉と医師を頼るのではなく、患者自身ががんのことをもっとよく知り、どう付き合うかを自分の頭で真剣に考えなくてはならない」と。

確かにそうだなあ、と思うことが私もあります。延命処置について決める時です。

患者さん自身が決定するような場合はまだいいのですが、認知症などで意思表示ができず、ご家族が決定しなくてはならない時、後でトラブルになることも。

話し合っても結論が出ず、「私には決められない。先生、どうすればいいですか？」「胃ろうがいいかどうか、分からない。先生がいいと思う方にしてください」と、聞いてくる――。

愛する家族の命にかかわる重大な決定を自分はしたくない。だから、医師にしてもらおう。そんな気持ちがあるのでしょうか。

欧米人と比較して、日本人の自己決定や死生観はもろい。「どう死んでいきたいか」という考えを持っている人は、健康な人ではほとんどいません。

宗教や哲学のバックボーンが日本には希薄だという理由もあると思いますが……。

「どう死んでいくか」を考えることは、「どう生きていくか」を考えることでもあります。

終末期、治療や療養はどのようにするのか、延命処置も含め、最期をどのように迎えたいか。

なかなか答えが出ないことだからこそ、日頃からしっかりと考えていくべきではないでしょうか。